

良い嘘の正解

齊藤愛利子

嘘をつくのはいかなる状況でも良くないと教わった人がこの世の半数以上を占めるであろう。人間はこの地球のどこに住んでいても学校の授業、親の教育、宗教の教え、など様々な場面で「嘘＝悪」の方程式を頭に刷り込まれる。私も幼い頃から親にこっぴどく教え込まれた影響で、正直であることが人生において最も重要なことだと信じてきた。

虚言を良くないことだと思っているのが前提にある私は、一番嘘についてはいけない相手は家族だと思っている。だが、今年のはじめに、母の誕生日にサプライズをし喜ばせたいがために、私の考えなりの「良い嘘」をついた。誕生日の当日、買い出しのために姉と外出をした。その時、母には目的の場所や帰ってくる時間も伝えずに遊びに行ってくるとだけ言った。当然、遊んだなんてことは無く、私たちは母に嘘をつき準備を進めた。人は大きくなり自分で判断をする機会が増えるにつれて、嘘をつくことについての考えが変わっていく。当時の私と姉にとって、一番の驚きをあげるために本当の行き先や行動をサプライズされる本人に伝えないのが「良い嘘」の正解だった。

その一方で嘘をつかれている母は、毎日家族のために尽くしているにもかかわらず、自分の誕生日を一回も祝わないまま外出した私たちに怒りが湧いていた。もちろん私たちの事情を知らないため、怒るのは当然だ。朝起きて、お誕生日おめでとう、の一言も、ちょっとしたメッセージカードもなく、まるでなんでもない日かのように振る舞っていた。そんな私たちは母の目にどう映っていたのだろうか。

私たちが帰宅したことを視認した母は私たちを暖かく家に迎え入れることもなく、何も言わずに寝室へと向かった。母が良からぬ勘違いをしていることを分からない私たちは何か母を怒らせるようなことをしたのかと困惑しその場で啞然とするしかできなかった。事情を聞こうと姉が母を呼び止めようとしても、振り返りもせず歩いていくだけであった。母を喜ばせるための計画が思わぬ方向で母を悲しくさせてしまった。嬉しい気持ちで溢れためでたい日が、母に嘘をつきサプライズを準備した私と姉、そして嘘をつかれたが故に誕生日を忘れられたと勘違いしてしまった母、との対立が生まれた日になってしまった。

相手が自分との会話を避けているようであれば話し合いで状況を改善することは当然難しい。だから私たちは無理に顔を合わせて話し合おうとせず、誕生日会の飾り付けをし次の日を待った。母は朝になり私たちが前日にした準備を見るなり驚いた顔をした。目の前には忘れられていたと思いついて自分の誕生日を祝う気持ちが前面に出されたリビングルームが広がっていた。元々、喧嘩や対立が起きると会話を通しての解決が苦手な母を理解し、悲しい思いをさせてしまったことの謝罪と誕生日の祝福の意を行動で示した。これで母に忘れていなかったよ、昨日はサプライズをしようとしてただけなんだよ、と言葉にせずとも伝わる。良かれと思いついた嘘が母にとっては苦であった事を理解できなかった私たちのミスだったのだ。

嘘は必ずしも悪だとは限らない。だが良い嘘や優しい嘘、悪い嘘や人傷つける嘘、この区別ができていないと自分の本来の意図に反した結果になる。全員が納得のできる「良い嘘」の正解はない。だからこそ自分の発言には気をつけ、相手にどういった影響を与えるのかを考えなければならない。、私たちの乗り越えた対立は、良い嘘とは何なのかと考える機会となった。

(1430)